

アクティブ・ラーニングを通じた生徒の学業の意義の変容

～『学び合い』の授業実践(数学)において～

○山崎 大樹(上越教育大学教職大学院)

西川 純(上越教育大学教職大学院)

j285644a@myjuen.jp

要約

本研究の目的は、『学び合い』を導入した学級において生徒達の学校教育における学業の意義がどのように変容するのかを明らかにすることである。その結果、生徒が単学級『学び合い』数学で目標達成に向かって課題に取り組んだり、友達にわからないところを質問したりする中で、学業の意義について変化したことが明らかとなった。

キーワード:『学び合い』, 中学校, 学業の意義

I 問題の所在

現状として2011年度国際数学・理科教育動向調査の国際調査結果報告では、『希望の職業につくために数学で良い成績を取る』、『希望の職業につくために理科で良い成績を取る』の質問項目でいずれも国際的にみて下位であることを示している¹⁾。また平成27年度全国学力・学習状況調査において(平成24年度に小学6年生,平成27年度に中学3年生)で実施した理科,国語,算数・数学の関心意欲態度の質問項目の「教科の勉強は役に立つ」では肯定的回答が減少している²⁾。ベネッセ教育総合研究所は,中学生に対して「学習上の悩み」に関するアンケートを行った。その結果,「世の中に出てから,もっと役に立ちそうな勉強がしたい」

「勉強する科目を自分でもっと選択できるといい」の項目で増加していると報告している³⁾。文部科学省は「子供たちが,学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し,これからの時代に求められる資質・能力を身に付け,生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするためには,子供たちが『どのように学ぶか』という学びの質が重要になる。」としており⁴⁾,このような能動的学修をするには「従来のような知識の

伝達・注入を中心とした授業から,教員と学生が意思疎通を図りつつ,一緒になって切磋琢磨し,相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り,学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。」と述べている⁵⁾。また,アクティブ・ラーニングの手法の一つとして西川(2015)が提唱する『学び合い』があり⁶⁾,篠崎(2016)はアクティブ・ラーニングの実践理論の一つとして『学び合い』を挙げている⁷⁾。しかし,アクティブ・ラーニングによって学業がどのように社会につながるか,役立つかという学業の意義について明らかにした研究は見当たらない。

II 研究目的

本研究では、『学び合い』を導入した学級の授業において生徒達の学業の意義の変容を明らかにする。

III 研究方法

1 調査対象

新潟県公立中学校,第1学年

10月上旬から単学級『学び合い』数学の授業を

導入している。

2 調査期間

平成 28 年度

10 月上旬から 12 月上旬

3 調査方法

西川が提唱する『学び合い』には、「学校は、多様な人とおりあいをつけて自ら課題を達成する経験を通して、その有用性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場」という考え方がある⁸⁾。この考えを用いて単学級『学び合い』数学の授業を行い、学習者全員と教師の発話をボイスレコーダーで記録した。また授業の様子を 2 台のビデオカメラで記録した。加えて、生徒に対してアンケート調査と個人インタビューを行った。

4 分析方法

〈分析 1〉

単学級『学び合い』数学時に、生徒の会話がどれだけまた、どのように発生しているのかを検証するため、生徒の会話を岸野麻衣ら(2005)の発言カテゴリーの分類基準に準拠して分類し、量的・質的側面から分析をする⁹⁾。

〈分析 2〉

生徒に単学級『学び合い』数学時の行動についてアンケートを実施し、それぞれ分析をする。

〈分析 3〉

生徒に単学級『学び合い』数学を受けてのインタビューを実施し、それぞれ分析をする。

IV 結果と考察

単学級『学び合い』数学において、仲間と協同したり、1人で課題に取り組んだりすることで生徒の学業の意義に変容が見られた。

※詳細は当日発表する。

引用・参考文献

- 1) 国際教育到達度評価学会 (IEA) : 「国際数学・理科教育動向調査の 2011 年調査 (TIMSS2011) 国際調査結果報告 (速報)」

<http://www.nier.go.jp/kiso/timss/2011/gaiyou2011.pdf>.

- 2) 国立教育政策研究所 : 「平成 27 年度全国学力・学習状況調査の結果について (概要) 別紙」, 2015 年 (平成 27 年 11 月 15 日閲覧)

<http://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukou/summary.pdf>.

- 3) ベネッセ総合教育研究所 : 「第 4 回学習基本調査・国内調査中学生版報告書」, P82, 2006.
- 4) 中央教育審議会 : 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」, 2012.
- 5) 中央教育審議会 : 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」, pp23, 2016.
- 6) 西川純 : 「すぐわかる! できる! アクティブ・ラーニング」, P31, 学陽書房, 2015.
- 7) 篠崎祐介, 黒川麻実, 國友芽意, 岩村孝治, 幸坂健太郎 : 「主体的・共同的な学びを支援する教師の実践理論への意識-『学び合い』実践者のフォーカスグループインタビューを通して-」, 言語文化学会論集, 46 号, 201-222, 言語文化学会, 2016.
- 8) 西川純 : 「資質・能力を最大限引き出す! 『学び合い』の手引き ルーツ&考え方編」, P83, 明治図書出版株式会社, 2016.
- 9) 岸野麻衣, 無藤隆 : 「授業進行から外れた子どもの発話への教師の対応-小学校 2 年生の算数と国語の一斉授業における教室談話の分析-」, 教育心理学研究 53 巻, 1 号, 88 頁, 日本教育心理学会, 2005.